ま と め

今年の自然しらべは、10年ぶりに淡水生のカメ。爬虫類のなかでもその姿に愛嬌があるため、お子さんから年配の方まで、分け隔てなく全国各地から観察記録が寄せられました。今回は、調査期間が6〜10月と長く、求愛行動や、産卵、孵化したばかりの稚ガメ…などの記録もあり、いきいきとしたカメの生態を知ることができました。

全体の集計では、予想通り外来種ミシシッピアカミミガメが6割と圧倒的に多く、特に一つの調査地から数十匹という報告がいくつも寄せられ、各地で増えている様子がわかります。現地での水辺の生き物やハス等の農作物への影響も想像に難しくありません。

一方、外来のカメは見つからず、在来種のニホンイシガメだけが報告された調査地が全国37ケ所で、多くが都市部から離れた山間部に見られました。こういった場所こそ、カメの生息環境である水辺エコトーン（移行帯:深みから浅瀬のある水辺、草地、田畑、樹林にかけての環境）がちゃんと残っているはずです。このような場所は、ニホンイシガメの聖域として考え、ペットのカメが遺棄されないように監視し、積極的にその環境を保全し、守っていくべきでしょう。

昨夏、ミシシッピアカミミガメの問題がニュース等で報道されるたびに、「飼っているカメ」の電話相談が多くあり、その都度「野外に逃さないで、最後まで飼い続けてください」とお願いをしてきました。現在でもミシシッピアカミミガメは稚ガメが大量に輸入され、流通販売されています。この状況を変えていくために、まずは外来生物法や動物愛護法などを段階的に適用し、輸入・流通に制限をかけ、野外への放逐を禁止することが必要です。外来生物問題は、外来生物に罪があるわけではなく、人間社会の反省のうえに、防除なども進めていかなければなりません。まだ少ないですが、各地で外来種の防除に取り組んでいる市民グループ、自治体、研究者の活動に参加したり、支援したりすることも一つの貢献になります。

この自然しらべをきっかけに、これからもカメが暮らす自然を観察し、どのような日本の生物多様性を未来に残すのか、考えていただければ嬉しい限りです。

大野正人（日本自然保護協会・教育普及部長）

参加者からの感想

人馴れしていない野生のカメは、接近すると逃げてしまい撮影が難しいですね。

葉山雅泰さん（千葉県）

気をつけているとカメって意外に見つかるものだと思いました。

益田勝行さん（熊本県）

以前から散策途中に見かけていましたが、種類など気にかけることなく、今回の機会がさらに興味を持つきっかけになりました。

関根京子さん（京都府）

野良カメが、全国的に増えているニュースを見ます。最後まで、責任をもって飼ってあげて欲しいです。

松本治美さん（長野県）

自然しらべのおかげで、綺麗な魚などいろいろな生きものも発見できてラッキーです。

古市浩康さん（岐阜県）

見つけたニホンイシガメの生息地は、水田、ため池や人家のある田園風景の中でした。長年人の営みの中で安定した環境が保たれたことにより生き残れたのですね。この環境が保たれると良いと思いました。

所沢あさ子さん（長野県）

NACS-J自然しらべとは

毎年のテーマ（観察対象）を、全国各地で一斉にしらべる、市民参加型の環境教育プログラムです。親子や友人を誘って参加してみると、みんなで身近な場所の生物多様性に気づく機会にもなります。また、みんなでしらべることで、自然を守る大きな力にもなります。1995年にスタートし、今年で18回目。これまでのテーマは、川（1995）、海・湖沼（1996）、里やま（1997）、里やま（1999）、川（2000）、気になる自然（2001）、渚［海・湖沼］（2002）、カメ（2003）、カタツムリ（2004）、10年目の川（2005）、バッタ（2006）、セミのぬけがら（2007）、カマキリ（2008）、湧き水（2009）、川（2010）、チョウ（2011）、貝がら（2012）、カメ（2013）。のべ参加者数は約70,000人になりました。

自然しらべ2013 日本の カメさがし！ 結果レポート編

●主催:日本自然保護協会（NACS-J） ●共催:読売新聞東京本社 ●協賛:サニクリーン、JR西日本、カロラータ、ホシザキチャリティクラブ ●誌面協賛:『一個人』KKベストセラーズ『ecomom』日経BP社、『旅の手帖』『散歩の達人』交通新聞社、『日経サイエンス』日経サイエンス社 ●協力:モンベル、『ガルヴィ』実業之日本社、ニコン、学研グループ、『このは』文一総合出版、コニカミノルタ、こどもエコクラブ、E-ne!〜good for you〜、NEC presents THE FLINTSTONE、日清製粉グループ本社、日本カメ自然誌研究会 ●活動助成:東京ガス環境おうえん基金 ●学術協力:矢部 隆（愛知学泉大学教授） ●のべ参加者数:3,389人 ●調査地点:1,456カ所 ●実施期間:2013年5月1日〜10月31日

日本自然保護協会

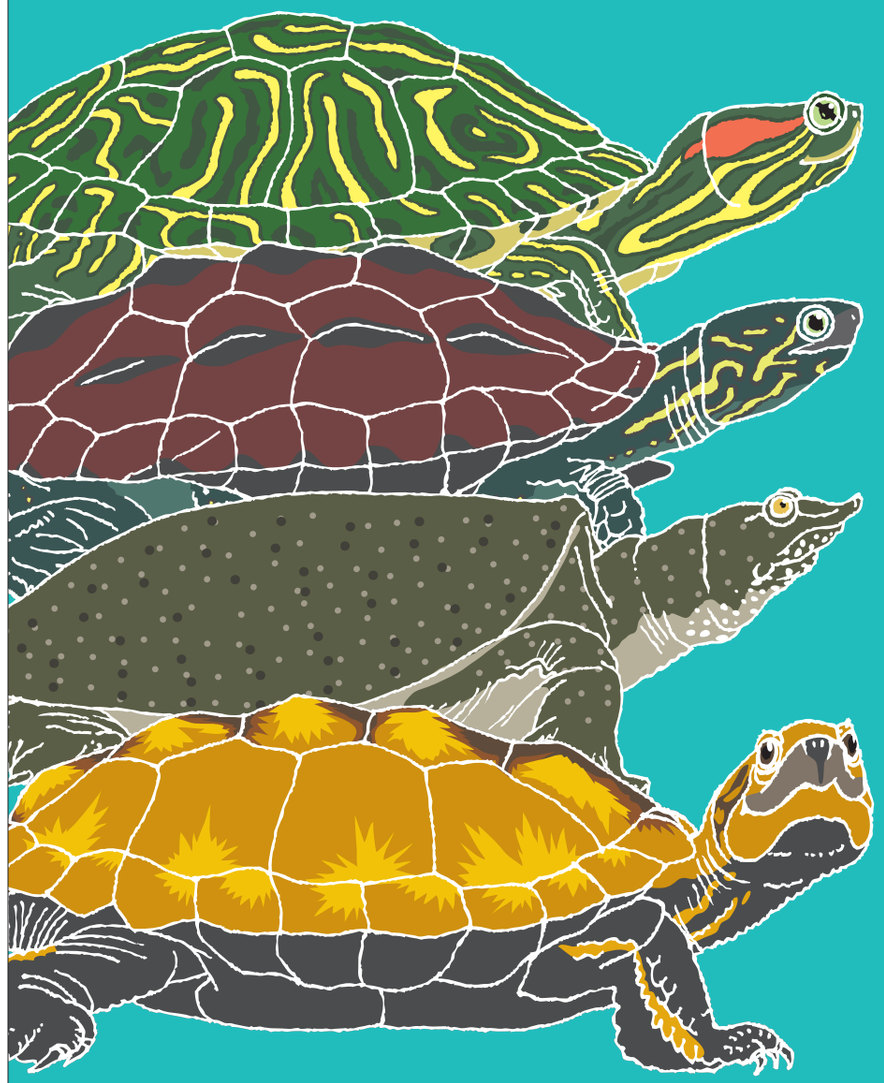
あなたも自然を守る仲間になりませんか　会員募集中！

〒104-0033 東京都中央区新川1-16-10 ミトヨビル2F　TEL:03-3553-4105　FAX:03-3553-0139　shirabe2013@nacsj.or.jp　http://www.nacsj.or.jp

「自然保護」NO.537（2014年1月1日発行）付録

Design. InterStudio inc.

自然しらべ2013



日本の カメさがし！

身近な生きものから見えてくる生物多様性

結果レポート

誰もが身近な公園の池や川で観察できるカメは、水辺の自然の状態を知るための手掛かりとなる生きものです。今回、参加者のみなさんと一緒にさがして、8,347匹のカメの情報が得られました。その中で記録写真からカメの種類が確認できた5,056匹のデータを用いて集計・解析を行いました。このレポートでは、日本で見られる主な4種類のカメを中心に結果を報告します。

主催　公益財団法人 日本自然保護協会　共催　読売新聞東京本社　誌面協賛　日経サイエンス　一個人　ecomom　散歩の達人　旅の手帖

協賛　Sanikleen　JR西日本　COLORATA　ホシザキチャリティクラブ

協力　mont-bell　GARRRV　こどもエコクラブ　Nikon　日清製粉グループ　このは　学研グループ　コニカミノルタ　日本カメ自然誌研究会　E-ne!〜good for you〜（FMヨコハマ）　NEC presents THE FLINTSTONE（bayfm）

「自然しらべ2013」は、東京ガス環境おうえん基金の助成を受けて実施しています。

カメをさがして、みえてくる 日本の生物多様性

ニホンイシガメ

六重部篤志さん（広島県）

ニホンイシガメは、生息環境の悪化やペット用としての乱獲などの原因により、全国的に個体数が減少しているといわれています。今回の調査では、東海以西の地域を中心に173地点から580匹確認されました。
送っていただいた写真記録によると、多くの場所で複数のミシシッピアカミミガメの中に1～2匹のニホンイシガメが混ざっている、という状態でした。また「数年前はニホンイシガメが多数見られる場所であったが、今はミシシッピアカミミガメばかりとなった」という同様の感想が数多く添えられ、10年前の調査の時と同じく、外来のカメに圧倒され続けていることが分かりました。
今回の調査では山形県鶴岡市の神社の池から複数個体の報告があり、自然分布の北限および東限が明らかになっていないニホンイシガメにとって興味深い情報が得られました。

クサガメ

佐藤宏治さん（神奈川県）

クサガメはミシシッピアカミミガメと生息場所が同じである場合が多く、ミシシッピアカミミガメに次いで多く報告されたものの、確認個体数はその3分の1弱でした。ニホンイシガメよりも広い範囲に分布していましたが、クサガメは幼体が商品名「ゼニガメ」としてペット流通しており、それが野外に放されて定着したと考えられる場所も多数ありました。そのいくつかではニホンイシガメとの交雑個体も確認されており、ニホンイシガメに対する遺伝子汚染の被害が心配されます。
クサガメについては、日本列島に生息するものは朝鮮半島か中国大陸から持ち込まれた外来種であることを示唆するDNAの研究報告もあります。この結論はまだ出ていませんが、今回のカメしらべで報告にあるいくつかのクサガメの生息地は、この種の生物地理学的な研究のために、より詳細な調査をする価値があります。

ニホンスッポン

佐藤利行さん（愛知県）

ニホンスッポンは臆病なカメで、水底にいることが多く、目撃される機会は少ないですが、今回の調査では、個体数は少ないものの、全国各地から108地点204匹の報告がありました。沖縄島からの報告もありますが、琉球列島には自然分布していないことが分かっていますので、持ち込まれたものが現地で繁殖したに違いありません。
また、食用に他の地域から移入されて養殖される場合や養殖の失敗で野外に放たれた個体やその子孫が定着していることもあるため、分布情報は慎重に評価しなければなりません。
日本の他のカメよりもずっと大きくなり、池や沼の「主」のような大柄のニホンスッポンが写された記録写真がありました。また、川遊びや自然観察会、水辺での調査の時に、手のひらに載る甲長5cmほどの稚ガメが数匹見つかっており、「かわいらしい」という感想も寄せられています。

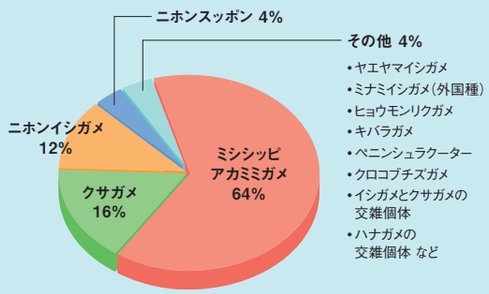
ミシシッピアカミミガメ

松本哲也さん（兵庫県）

10年前に自然しらべで行った調査と同じく、今回も飛び抜けて多数の個体が観察されており、個体数だけではなく分布の範囲も他のカメよりも大きく、北海道から沖縄島まで見つかっています。前回の調査の時と分布の範囲はそれほど変わっていませんが、一度の調査で非常に多数の個体が観察される地点が増えていました。
このカメのオスは高齢になると黒化して、頭部の朱色の模様や喉の黄色い腺が消えてしまいます。そのためにニホンイシガメと間違えて報告されている事例が多かったです。いくつかの調査記録写真で、種の同定をし直すことができました。
近年ミシシッピアカミミガメが外来生物として野外で急増していることが、ようやく社会問題として注目されるようになりました。今回の調査結果は、ミシシッピアカミミガメの日本での分布や生息の実態を把握し、対策を考えるために非常に重要な資料です。

「ニッポンのカメのいる風景」写真コンテスト　結果発表!

自然しらべでは、対象の生きものを写真に撮って、観察記録や場所の情報と一緒に送ってもらうことにより、科学的な精度をもった調査記録になります。その中には、アッと驚く画像も多く含まれています。今年は調査期間中に投稿された記録写真を対象に、写真コンテスト（協力:株式会社ニコン）を行い、5名の方が入賞されました。グランプリは小峯昇さん（埼玉県）で、カメ4種が見事に並んだ瞬間をとらえた作品です。その他の入賞作品は自然しらべのwebサイトでご紹介しています。



カメの調査記録について

今回、画像からカメの種類が判別できた5,056匹を対象に集計・解析を行いました。その結果、約64%の3,256匹がミシシッピアカミミガメの記録でした。クサガメは約16%・793匹、イシガメは12%・580匹となりました。また、国指定の天然記念物のリュウキュウヤマガメやヤエヤマセマルハコガメなどの希少なカメの情報も計13件寄せられる一方で、関東からの特定外来生物であるホクベイカミツキガメの情報や、遺伝子汚染が心配される交雑個体やペット由来のチズガメ類の報告もありました。

成果報告会のお知らせ

日本固有のカメが減り、外来のカメが増えている現状を今回の自然しらべの成果から詳しくお話しします。

- 日時:2014年2月13日（木曜日）18時半～20時
- 定員:先着40名（参加費　会員100円　一般500円）
- 講師:矢部隆（自然しらべ2013学術協力者）
- 場所:環境情報ひろば 丸の内さえずり館（東京都千代田区）
- アクセス:JR又は地下鉄有楽町線、有楽町駅徒歩2分、日比谷線日比谷駅徒歩5分
- 申込み:日本自然保護協会・自然しらべ係（Tel 03-3553-4105）

そのほか、本結果レポートに掲載しきれなかった集計・解析結果は、NACS-Jのwebサイトと報告書で公表していきますので、ぜひご覧ください。